

私の幼児教育論 I

“幼児とともに”



神 沢 良 輔

一、はじめに

最初から私ごとになってまことに恐縮ではあるが、私の幼児遍歴も、いつのまにか、二十数年になってしまった。この間、四日市の市立教育研究所員として十一年、市立幼稚園長として十二年をすごし、今年の四月から、同じ四日市市にある暁学園短期大学に勤務することになった。

そこで、本誌の編集者から、このような機会に、“私の幼児教育論”とでもいうものを連載してはどうかというお話があり、喜んで引き受けたまではよかったのであるが、いざ書き始めてみると、どこからどう始めたらいいかということや、私の非力のために、どうにもうまくいかず、結局は、いろいろ考えあぐねたうえ、初めに、少し大げさにも思われるが、現場の実践の本質とでもいうものを、私なりにまとめてみることにした。

二、幼児とともに

—— 幼児との生活の意義 ——

私の転勤は、きわめて他動的なことからであったが、いざ、幼稚園での幼児との生活から、幼児のいない生活に入ってみると、幼児のいる生活というものについての意義を、いまさらながら強く感ずるのである。

そこで、初めに、幼児との生活の意義について見ていきたいと思うのである。

(i) そこに幼児がいる

幼児とともに生活しているものにとつて、そこに幼児がいるということは、きわめて当然のことであり、なんの不思議もないのであるが、なんとも表現できない幼児たちの生命力にとんだ、元

気のよいざわめき、かん高い声、ときには泣き声といったものが、生活の環境の中にないということは、とてもさびしいことである。

幼児がいつも生活の中にいるということは、実践しているときには、あまり気がつかないことではあるが、やはり幼児から離れてみると、幼児と生活していることの重大さに気づくのである。

私などは、どちらかといえば、幼児教育の実践者というよりは、部外者がそこへ入りこんできて、実践のじまを続けてきたような存在であったのであるが、それでも、そこに幼児がいないととなると、やはり、そこに幼児がいるということの尊さや意味を、あらためて感じるのである。

(ii) 幼児とともに成長し発達する

私は前述のように、幼稚園に勤務する前にも、教育研究所にいたということから、幼稚園へは、保育者との共同研究のためになんども行く機会に恵まれたし、ある研究などでは、ほとんど一年を通して、平均して毎週一回程度行ったことがある。

そこでは、私はたしかに、幼児の一年間の発達を私なりに把握したという研究者としての喜びがあったと思うが、幼児とともに

成長してきたという喜びにはならなかった。だから、一つの研究が終ると、それをもとにして、つねに新しい研究課題の発掘を始めるなければならなかったし、問題意識ばかりが前面へ出てくるということにもなりかねなかったのである。

もちろん、私のこのような態度は、幼稚園に勤務してからでもあまり変わることはなかったし、いつも幼児教育の問題点の掘りおこしばかりしているようにも思われるが、逆にいえば、このような態度が、現場で幼児と生活している保育者としては、もの珍しくもあり、ときには珍重されるという結果にもなったように思われる。

だが、今になってよく考えてみると、やはり、研究所時代の幼児教育に対する問題の捉え方と、幼児と生活していた幼稚園時代のそれとは、本質的に大きな差異があったように思われるのである。

つまり、幼児との生活が始まってからは、幼児教育の問題を考える場合、幼児との生活そのものが、いつも生き生きとして、私のイメージを支えていてくれたからである。しかも、その幼児は、ひとりひとりの具体的な個性をもった生きている幼児であり、決して、不特定の幼児や幼児一般ではないということである。研究所時代には、それがなかったのである。それは、入園以

来、私とともにつねに変化し発達していく、ひとりひとりの幼児そのものであった。

このような実感は、やはり現場における幼児観の基本にならなくてはならないものであるうし、現場での研究の基本にならなくてはならないものであらうと考えている。

(iii) 幼児とともに成長を喜びあう

そのことは、保育者の側からいえば、幼児とともに、その成長を喜びあえるということになる。

私はこれまで、どちらかといえば、幼児を客観的にみるということに慣らされてきたようにも思うし、このような方向に自身自身をもっていくように努力していたようにも思える。

このようなことについて、自分に対しての弁護のない方が許されるならば、これまで、私に課せられた課題は、現場の実践を理論化することであり、いろいろなこれまでの研究者の研究から実践に必要なものをうまくとり入れて、現場と研究者の間のパイプ役になっていくのが、仕事であると考えていたためでもある。

しかし、私が幼稚園の現場を去らねばならぬということが、客観的事実としてしだいに明らかになってきた今年の一月からは、このような自分自身に対して、なんとなくやりきれない気持ちにな

るとともに、このような考え方に対して、きびしいさびしさをもつようになってきた。そして感情的には、いわゆるセンチメンタルになっていく自分というものに気づくようになった。それがなんであったかは、今ははっきりいうことはできないけれども、やはり、生きていて、保育者とともにつねに変化し成長し続けている、ひとりひとりの幼児への愛着であるとともに、幼児とともに生活しているという実感からであったということであらう。

また、私が客観的方向で幼児を見ることができたのも、やはり今になって思えば、いつもともに生活している幼児たちがいるということが、その支えになっていて、そのことに甘えていたのではないかと思うのである。

だから、そのような幼児たちのいない客観とは、いったい何であるかということ、これから私も、幼児教育の研究の中で、もう一度考えなおしてみたいと思うのである。

いずれにしても、目の前にいるひとりひとりの幼児とともに、その成長を喜びあい、その中で泣いたり笑ったりできる現場の保育者は幸福であり、本気になって実践にとりくんでいるという実感は、やはり、幼児教育のもっとも基本であり、現場の保育者でなければ味わえないものであると、つくづく思うのである。私も、やはり、ぜひいつかはもう一度、幼児とともにいる生活をし

てみたいと思つている。そのためにも、一時、幼児から離れることは、ある意味ではよいことかもしれないと考えて、今は自身自身をなぐさめることにしている。

(iv) 幼児から学ぶ

このような実感は、幼児から学ぶという、現場の実践をともにやってあらわれてくる。幼児は、自分の感情を受け入れてくれる信頼できる大人にしか、自分の内面の世界を見せてくれない。それも、外部からの一回や二回の接触ぐらいでうまくやろうなどというのは、きわめて無理な相談であり、一時的にはなにか成功しているように見えても、結局は幼児の外面的な行動を見るといふことになつてしまう場合が多い。

私なんか、ときどき担任の保育者が休んだときなどに、その学級の幼児たちを対象にして、一緒に遊ぶということがあったが、幼児たちとうまく遊べたという実感をもつたことは、自慢にはならないが一度もない。おそらくこのようなことは、今後ともないであらう。

これは、私の保育があまりにも未熟すぎるということに由来しているが、しかし、担任の保育者がいるときに、幼児たちの中に入って遊ぶと、案外に、幼児たちは私を受け入れてくれて、うま

くいくことが多いのである。このようなことを考えてみると、担任というものが、幼児に対していかに大きな影響をもっているかということに気づくとともに、幼児を外からいくら客観的に見たとしても、そこには、ほんとうの幼児は存在していないということになる場合が多いのではなからうか。少なくとも、幼児から学ぶということとは、現場の保育でなければ、きわめてできにくいことであるし、幼児から学んだということは、みかけはいかにさ細なことにみえるようなことでも、そのことはきわめて尊いことなのである。また、そのためには、現場の保育者がいかに大きな役割を果たしているかということを感じするわけだし、そこにも現場のもつている、現場のよさというものが、うかがわれるのである。

いうまでもなく、私は、学問的な計画された客観的な研究を否定しているわけではない。ここでは、幼児から学ぼうとする保育者こそ、幼児の内面の世界に入っていくことができるし、その中で、幼児を理解できるという特権を発揮してもらいたいということとを強調したかったからである。

(晩学園短期大学)